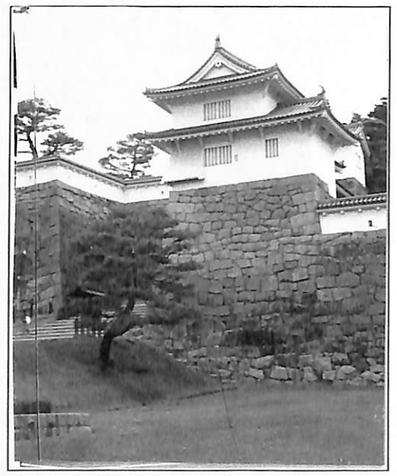
鷲津　様

第　２７　回

白河小峰城と二本松城、みちのくの城を歩くバスツアー

白河小峰城



二本松城

平成１５－１１－９（日曜日）

城と史跡を歩く会

2

バ　ス　席　表

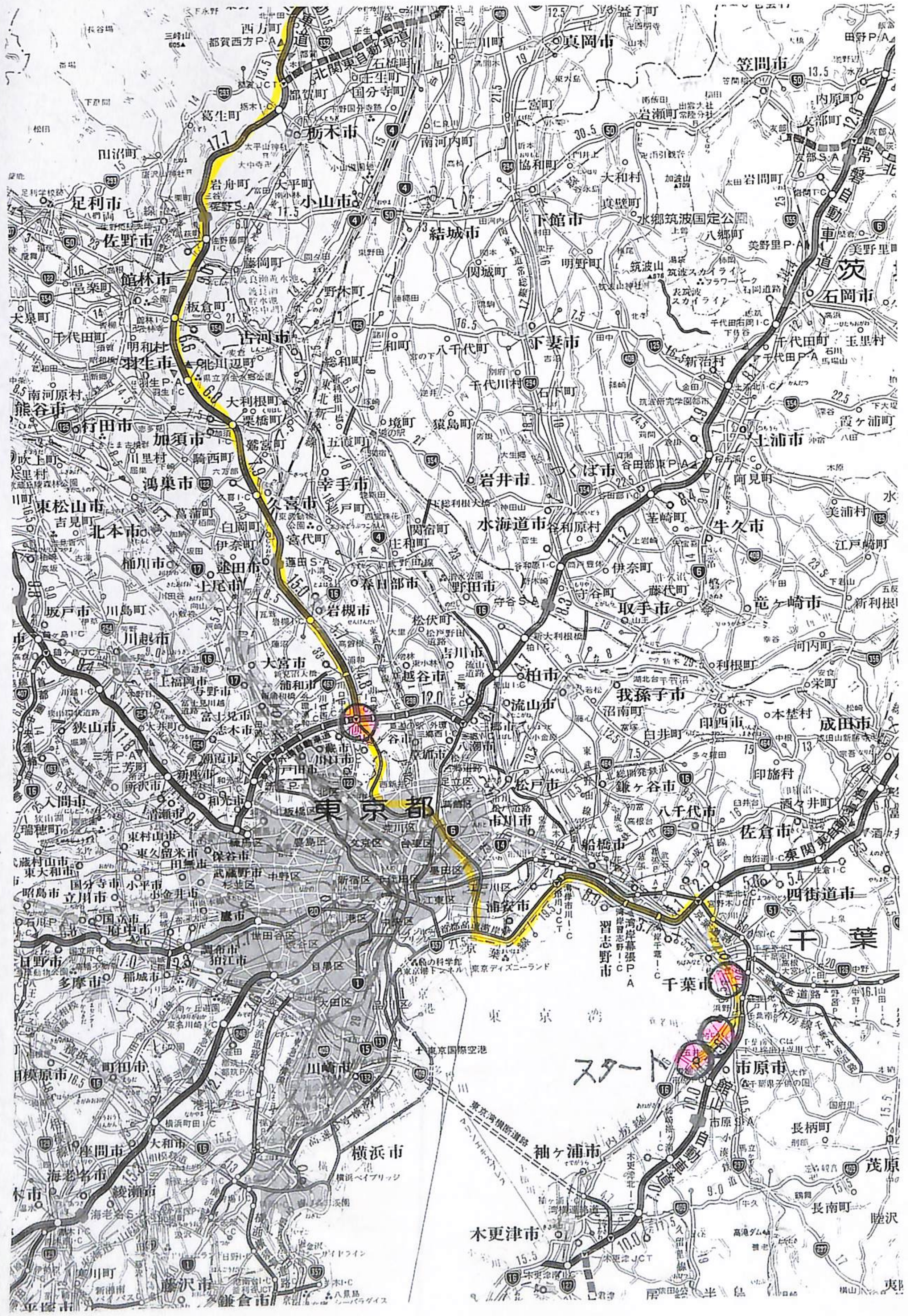
	出入口側			運転手側	
1	小出惣治	山岸弘明		高澤恒子	鷲津寛子
2	竹内　克	高澤　毅		藪本テイ子	小倉すみ
3	皆川　清	斎藤　実		若菜幾世	山田恵美
4	高城富子	高城正雄		斎藤定子	池田美志子
5	稲葉ミツ子	竹上　茂		柳沼房子	加藤幸子
6	千葉範子	鈴木クニ子		小出敏子	大岩勝男
7	吉水正子	板垣てる		市原享子	卯月礼子
8	猪野春枝	白土貞子		吉池一彦	吉池町子
9	鈴木淳子	渡辺清枝		山城美智	青木千津子
１０	藤沢真知子	田中勝子		荻田恵子	熱田百代
１１	神林敏夫	神林良雄		渋木奎吾	渋木恵美子
１２	今井勝昭	小北絢士	笹島　稔	金子昭夫	板倉　満

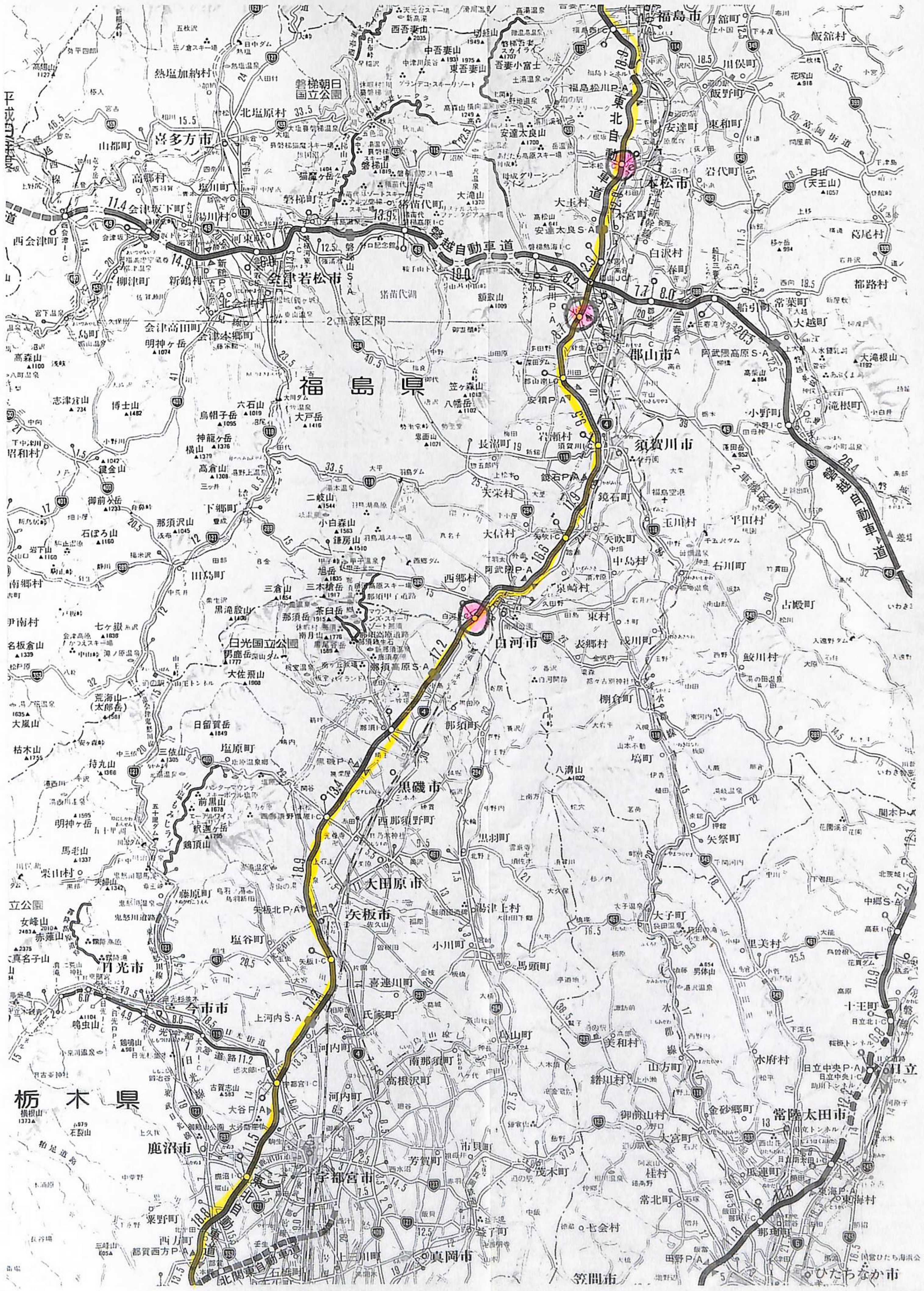
世話人分担

山岸＝ご案内
小出、高澤毅＝総括進行
高澤恒＝会計、五井駅乗車担当
鷲津、藪本＝総務、八幡公民館乗車担当
協力
竹内＝車中解説
皆川＝写真

緊急連絡用携帯番号　０９０－６０３６－２０８７

＊右ページへつづく



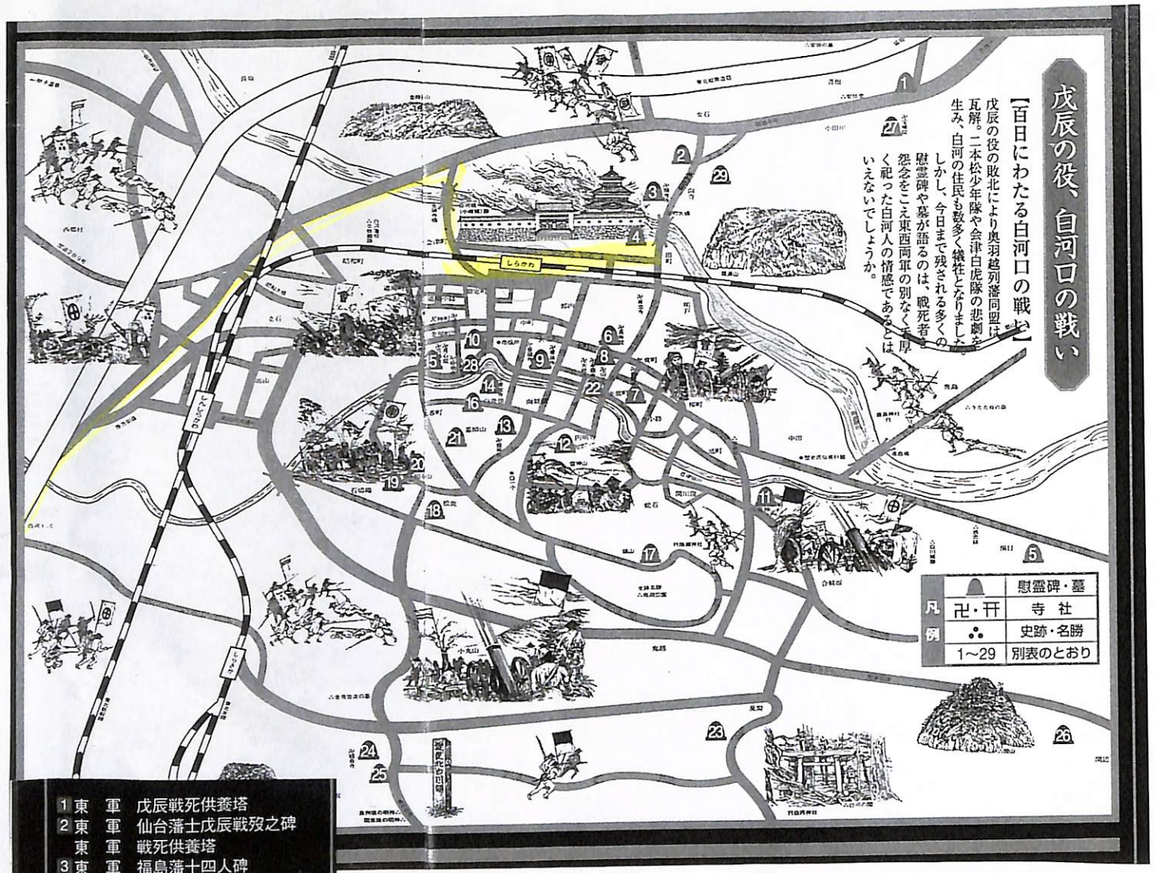


＊左ページから

戊辰の役、白河口の戦い

【百日にわたる白河口の戦い】

戊辰の役の敗北により奥羽越列藩同盟は瓦解。二本松少年隊や会津白虎隊の悲劇を生み、白河の住民も数多く犠牲となりました。しかし、今日まで残される多くの慰霊碑や墓が語るのは、戦死者を怨念をこえ東西両軍の別なく手厚く祀った白河人の情感であるといえないでしょうか。



1	東軍	戊辰戦死供養塔
2	東軍	仙台藩士戊辰戦歿之碑
	東軍	戦死供養塔
3	東軍	福島藩十四人碑
4	西軍	戊辰薩藩戦死者墓
5	東軍	戊辰戦死之碑
	東軍	戦死数名埋葬
6	西軍	慶応戊辰殉国者墳墓
	西軍	白河役陣亡諸士碑
7	東軍	戊辰役戦死之碑
8	東軍	戦死供養塔
9	東軍	戦死人供養・弘前藩菊地央五郎の墓
10	東軍	棚倉藩小池理八供養
	東軍	仙台藩石川大之進之墓
11	東・西	戊辰役戦死之碑
12	東軍	二本松藩士慶応戊辰戦死之霊
13	東軍	会津藩海老名衛門君碑銘
	東軍	戦死塚
14	東軍	棚倉藩阿部内膳之墓
	東軍	会津藩戊辰戦死十二志之墓
	東軍	南無阿弥陀仏
15	西軍	芸藩士加藤善三郎墓
16	東軍	無縁塚
17	東軍	棚倉藩鎮英碑
18	西軍	長州・大垣藩戦死六人之墓
19	東軍	会津藩戦死墓
	東軍	会津藩鎮魂碑
20	東軍	会津藩田邊軍次君之墓
21	東軍	仙台藩斎藤善治右衛門戦死供養
22	東軍	南無阿弥陀仏
23	(農民)	大竹繁三郎之墓
24	(庄屋)	大平八郎之墓
	西軍	大垣藩酒井元之亟之墓
25	西軍	戊辰戦没旧大垣藩士酒井元之亟戦死之跡
26	東軍	戦死墓
27	東軍	仙台藩佐々木廣之助之墓
28	東軍	戦死供養塔
29	(遊女)	志げ之墓

熱き日の径しるべ

【戊辰の役】

江戸時代末期の慶應四年（一八六八）九月八日、年号が改元されて明治元年となり、長く続いた幕藩体制も終焉を迎え、日本の近代の幕が明けました。しかし、明治を迎える直前の慶應四年閏四月から七月にかけて白河を戦場とする大戦争がありました。戊辰の役・白河口の戦いです。会津藩・仙台藩などを中心とする奥羽越列藩同盟（東軍）の諸藩が、藩主不在の白河小峰城に集結し、奥州街道を北上する新政府軍（西軍）と激突したのです。

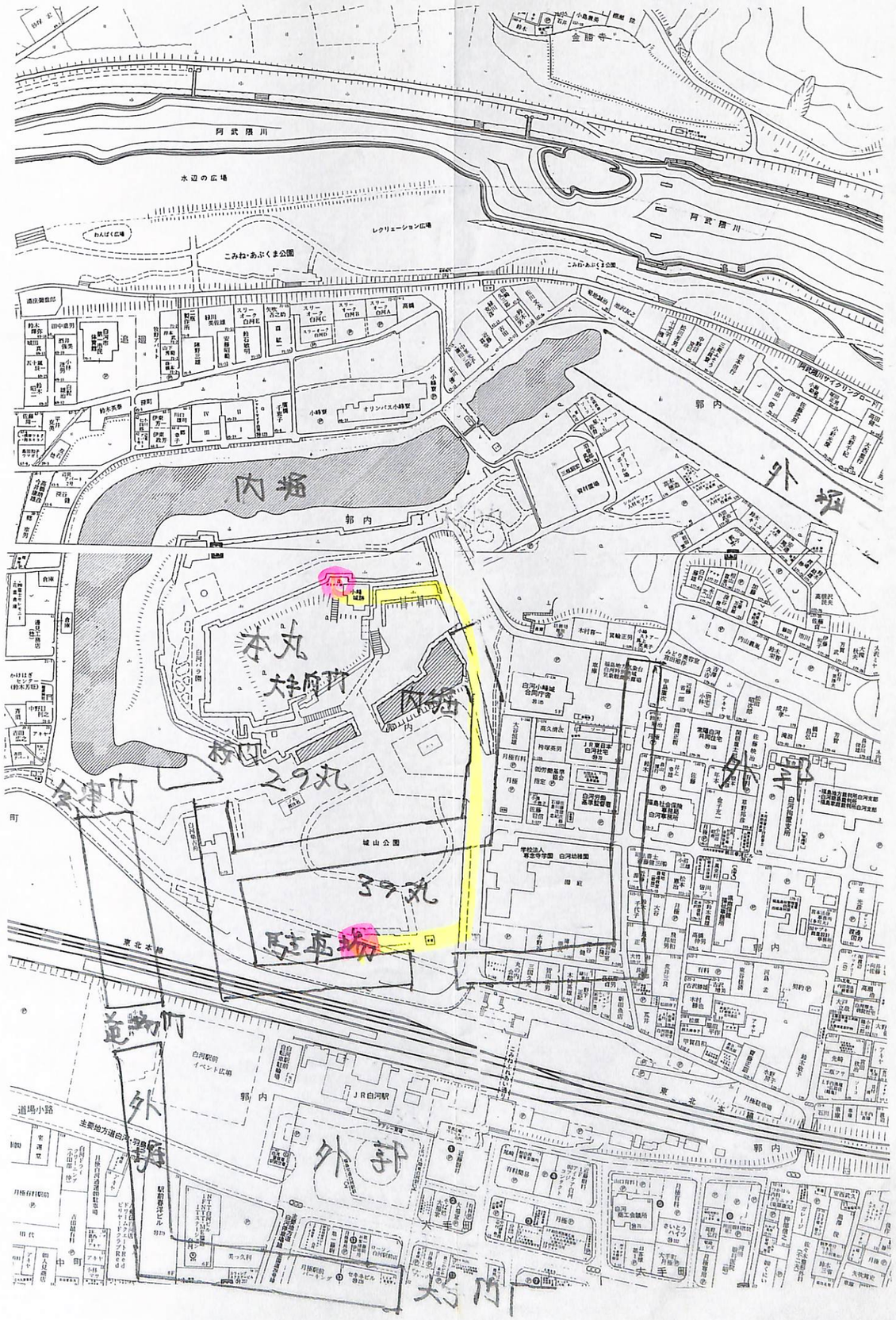
約一〇〇日間にわたる白河口の戦いでは、新政府軍と奥羽越列藩同盟軍の両軍あわせて八〇〇名を超える（不明者も含め一、〇〇〇名近い）戦死者があり、戊辰の役の中では激戦地の一つとなっています。

【残された歴史の跡】

戊辰の役・白河口の戦いによる東西両軍の戦没者の墓・供養碑は、白河市だけでも五〇以上の数が建立されています。本町の長寿院墓地には、西軍戦死者の官営墓地として、長州・土佐・佐土原・大垣・館林藩などの各藩ごとの墓域が所在しています。また、小峰城東側鎮護神山には薩摩藩戦死者の墓があります。東軍戦死者の供養碑は、戦闘場所となった市街地のあちこちに散在していますが、最大の激戦地となった松並に会津藩、南湖公園内には阿部棚倉藩、向寺聯芳寺には福島藩、女石には仙台藩、円明寺には二本松藩の鎮魂碑がそれぞれ建立されています。

戊辰の役の弾痕

市内に残る戊辰戦争の供養碑



1）　**白河小峰城主ものがたり**

①白河結城氏と２つの白河城＝
中世に白河地方を支配した結城氏は山城の白河城を本拠にしたが長男に小峰城を築かせた。後、内紛のため両家は戦い、勝った本家が小峰城に移った。長い城名は中世白河城と区別のため。単に白河城とよぶ人もある。

②羽柴（豊臣）秀吉もあやかった丹羽家＝
長重の父は織田信長家中で柴田勝家とならび称された長秀、秀吉の羽柴姓は２人の勇名にあやかったことで知られる。関が原の合戦で石田三成に与して改易の危機を迎えたが１万石で再出発、子孫は二本松10万石で明治維新となった。

③寛政の改革を断行した松平定信＝
８代将軍吉宗の孫で御三卿田安宗尹の三男から養子。田沼意次に変わって老中首座にすすんで「寛政の改革」を推進した。

④兵庫開港で罷免された阿部正外＝
幕末14代将軍家茂期の老中。英仏米蘭４国から兵庫開港を迫られた幕府の承認方針が朝廷の忌諱に触れ、勅命で解任、謹慎を命ぜられた。

2）　**白河インターから城内駐車場へ。南側ＪＲ駅方面を遠望**（外曲輪）

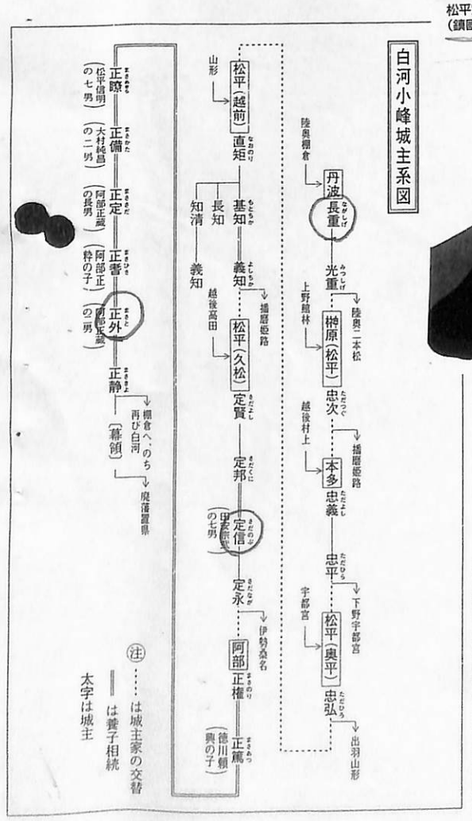
①東北自動車道を白河インターで下車。およそ１０分、いきなり城内の駐車場へ。
②バス駐車場の南側正面はＪＲ白河駅。ただし裏側で改札口もない。
かつての白河小峰城のほぼ中心、東北本線が３の丸と外曲輪の間の水濠跡を走り抜ける。
③駅反対側が官庁舎、商店街など市の中心地でかつての外曲輪、上級藩士街。当時、外堀が武家地と町屋を分けた。
④外曲輪の先が城下町。奥州街道が城の南前面と西側面をかすめるように北へ延びた。

3）　**城山総合公園**（３の丸、２の丸）

①眼前、高石垣に白河小峰城本丸の三重櫓が聳える。本丸、帯曲輪、竹の丸、２の丸、３の丸跡合わせた一帯が市史跡の城山総合公園として保存されている。
②駐車場周辺は３の丸で家老、城代などの重臣邸、町役所、勘定所、郡代会所が置かれたが、松平定信時代は一部に３の丸御殿（下屋敷）、三郭四園と呼ばれた下屋敷庭園、後期に藩校、立教館、修道館があった。
③公園の本丸側はかつて水濠をへだてて２の丸だが、埋立て公園として整備されたので遺構はまったく残っていない。２の丸は御城米、大庭蔵、用屋敷が置かれた。
④白河集古苑＝平成６年建築の資料館

松平定信自画像
（鎮國守國神社蔵）

1783年（天明3年）東北地方は大飢饉に襲われる。白河藩の被害も大きく、26歳の定信はそのような最悪の状況下で藩主の座に就いた。
危機に際して定信は「凶には凶の備えをすればよいのだ」と宣言し、領内に食料を確保し、飢饉から民を救うことに全力をそそいだ。越後の分領や近隣の東北はもとより、遠く東海にまで家臣を派遣し、米を買い集めて白河へ送らせた。こうして、のち仙台藩や津軽藩と異なって「わが領国は死せる者なしといえり」と自賛する結果を生み出した。この自負と自信が定信に藩政改革を進ませ、やがては名君との評判をもたらすことになった。



城山公園から小峰城をのぞむ

4）　**清水門と内堀（現存、復元）**　（帯曲輪）

①２の丸から本丸帯曲輪への城門。冠木門を復元。ここからが主郭、本丸への登城門。
②本丸前面の内堀、石垣と水濠を観察。
③帯曲輪は本丸を一周する細長い曲輪。戦時は本丸の最前線基地となり、兵士の移動、武器弾薬の輸送などに使われる。中世の山城に多く、近世城郭ではめずらしい。

5）　**高石垣と本丸前門（現存、復興）**　（本丸）

①見上げる高石垣。およそ20m？。打込みハギだが切込みハギに近い。打込み荒削りした大石を積上げ、隙間を合石、小詰石で仕上げる。急勾配で高石垣を作るには石材の精密加工が欠かせず完成された石組み技術を感じさせる。
②本丸前門から渡櫓門と続塀、三重櫓を眺める。白河小峰城一番の見どころ。
③前門は渡櫓門形式。両側石垣の上に渡櫓を乗せ、１階は大御門。２階は空洞、平時は武器倉庫で、戦時は格子窓の狭間から鉄砲、弓を射かける。正面突破は不可能だ。

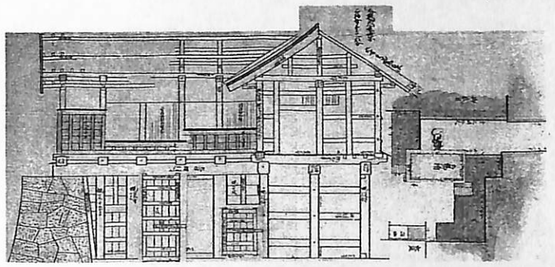
6）　**本丸御殿跡**（本丸）

①正面平坦部分は本丸御殿跡。豪壮な桃山殿舎を連ねたが明治維新の戦いで焼失。
②歴代藩主、家族が生活。といっても正室、世子は江戸屋敷で人質。
③御殿は表向き（政庁）、奥向き（家族生活）、藩主居所に分かれた。

7）　**おとめ桜**（本丸）

①寛永築城のとき、本丸石垣が何度築いても崩れたので、大工の娘「おとめ」を人柱にした。その後、人柱の地に桜樹が生えた。人々はおとめが桜になったといたわしい少女の霊に合掌したという。
②明治維新の戦いで初代は焼失、現在のものは２代目。

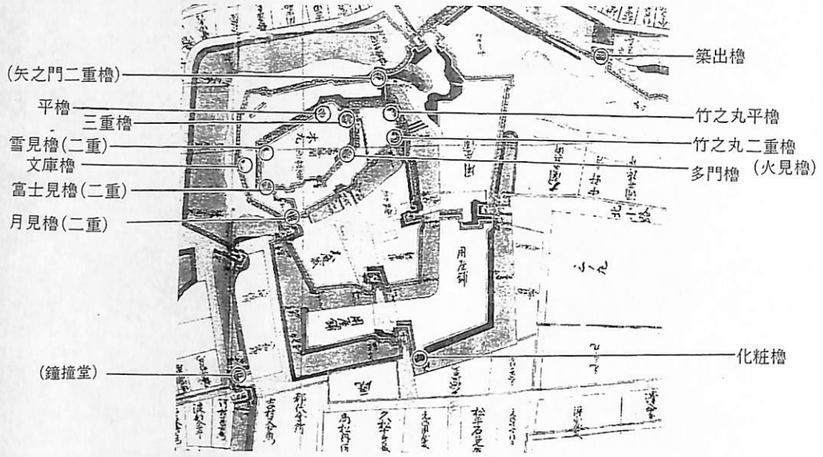
内堀


←本丸前門

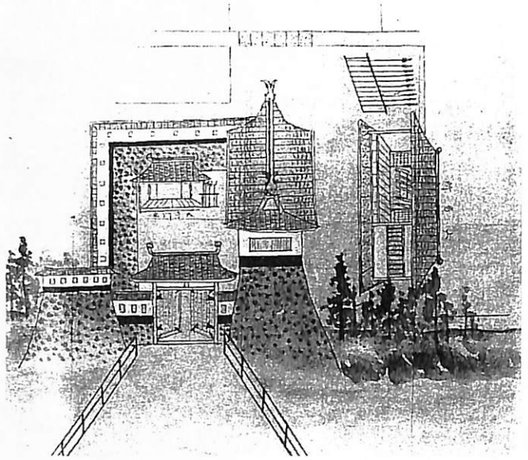
本丸御殿跡

内堀から三重櫓をのぞむ

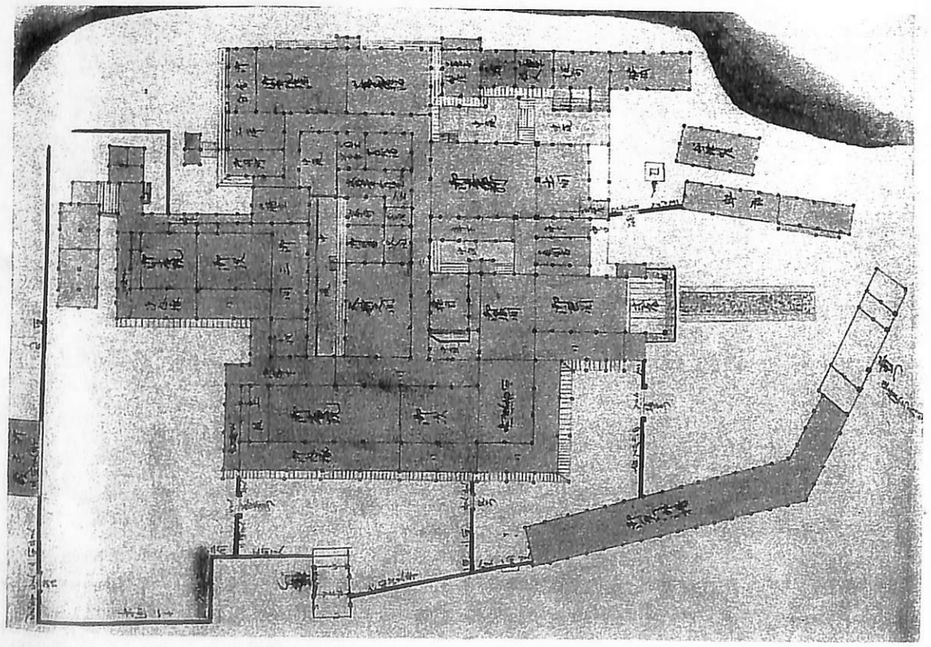
←おとめ伝説



↑ 櫓配置図



↓本丸復元図



城と史跡を歩く会＊第２７回
「白河小峰城と二本松城、みちのくの城を歩くバスツアー」ご案内資料

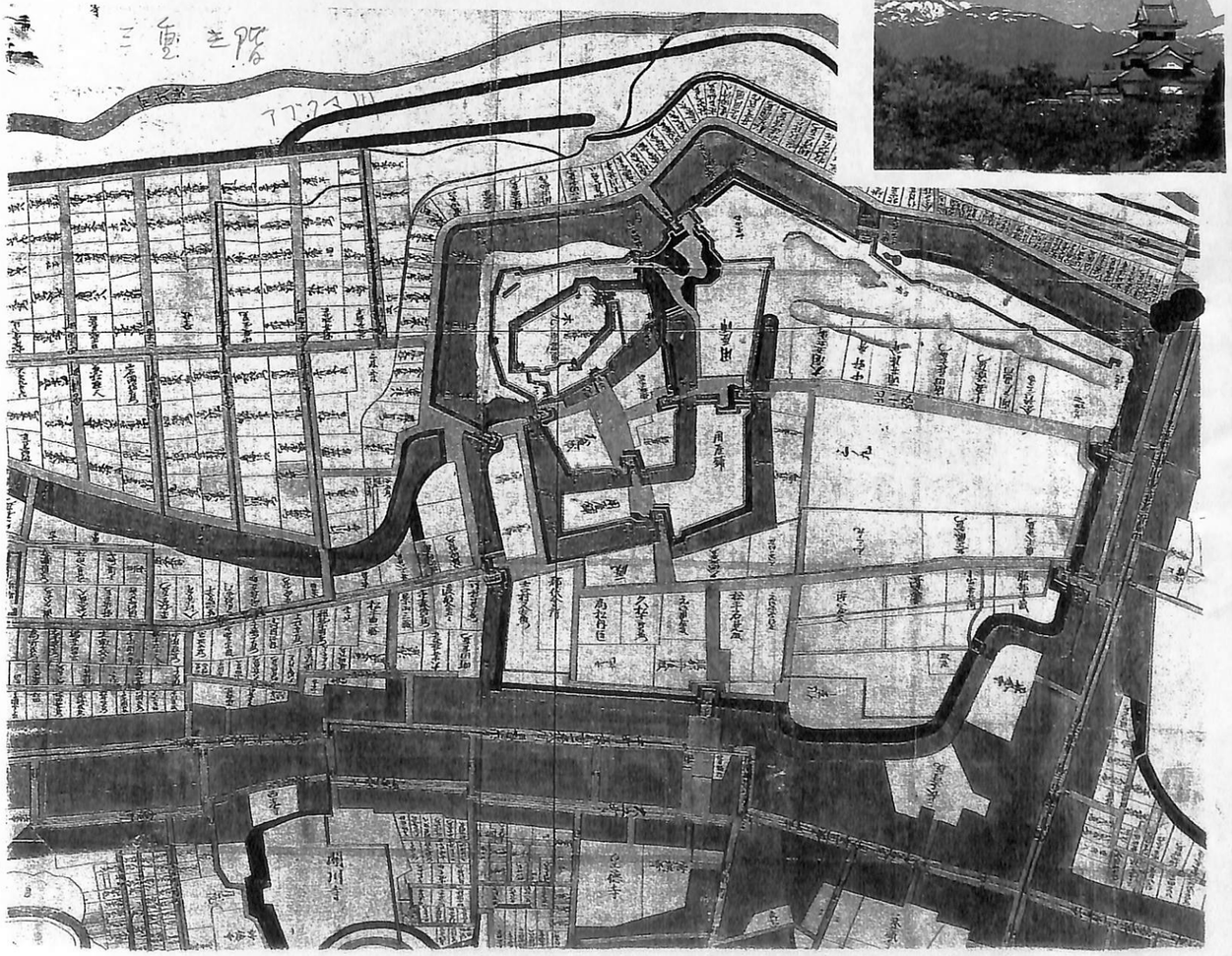
＜日時＞	平成１５年１１月９日（日曜日＝予備日なし）
＜主要行程＞	五井駅東口６時００分、八幡公民館１５分、蘇我駅西口３０分発（１５分前集合） 湾岸道路、首都高速、東北自動車道（途中トイレ休憩）白河インター、白河小峰城、郡山（弁当積込み、車中昼食）、二本松城 、時間あれば大隣寺にも 復路＝往路を逆走、出発地２０時ころ着 天候、道路事情などにより予定を変更することがあります

山岸弘明

白 河 小 峰 城

奥州の抑え――明治維新の戦いで争奪の的となった譜代の名城

白河は陸奥の入口。５世紀ころ、蝦夷の南下を防ぐ目的で白河の関も置かれた。小峰城は14世紀中ごろ、結城親朝が築き、のち白河小峰氏の本城となった。天正18年、豊臣秀吉の小田原征伐に不参、秀吉の怒りを買って没収、蒲生、上杉領をへた寛永４年（1627）安土城を築いた城造りの名手丹羽長秀の子長重が入城して近世城郭に作りなおした。江戸時代を通じた奥州の抑えで、榊原、本多、奥平、久松家など譜代名門家が相次いで封じられた。明治維新の戦いでは官軍と奥羽列藩同盟軍の争奪の的となり、激戦の末落城、その際に本丸御殿、三重櫓、前門などを焼失した。現在の白河小峰城は当時のおよそ６分の１にあたる本丸部とそれを囲む内堀だけが現存し、２の丸、３の丸は公園、外郭はＪＲ白河駅と線路敷、官庁街などに変わっている。本丸石垣、水濠は現存、昭和57年以降発掘調査を進めて、平成３年天守閣相当の三重櫓と本丸前門などを復元して往時の白河小峰城の景観が蘇っている。



8） **三重櫓（復元）**　（代替え天守閣）

①元和の「一国一城制」以降の城のため大規模櫓を遠慮。天守閣を作らず、三重櫓を代替えした。
明治維新の戦いで焼失、平成３年、現存図を忠実に復元。

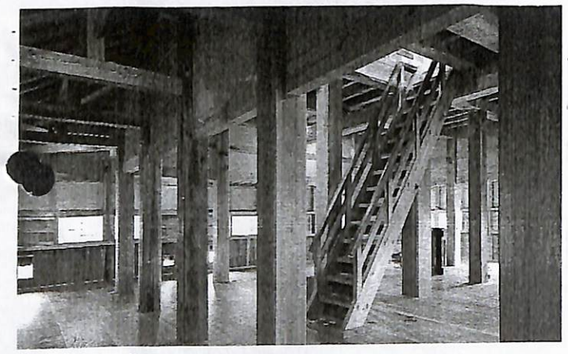
②３重（外観）、３階（内部）、高さ14m。
屋根切妻造り、本瓦葺き、瓦製シャチ１.２m。
張出し破風。高覧なし。外壁腰下見板張り黒漆塗装（復元は古色塗り）。白漆喰。付櫓。
延面積78坪、１階51坪、２階22坪、３階４坪。低減率は各階２間で安定した美しさ。

③当時の木材は土台が栗、通し柱など主要材は松、ほかは楢、桂など。
復元は基礎コンクリート、本体木造、材質？

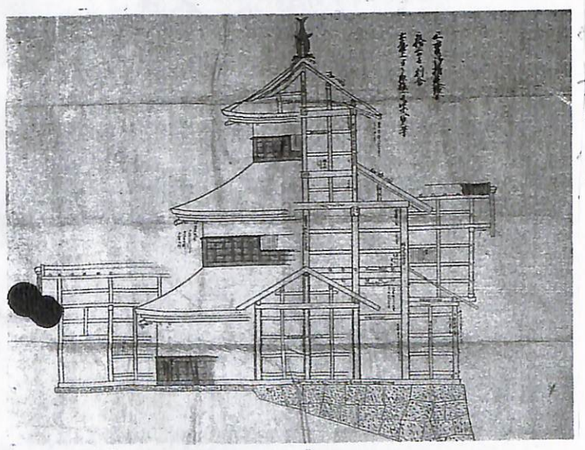
④内部自由見学（入場無料）。通し柱、石落とし、連子（格子）窓、狭間、戊辰戦争弾傷などに注目。
３階からの眺望もすばらしい。

9） **桜御門（現存）**　（搦手）

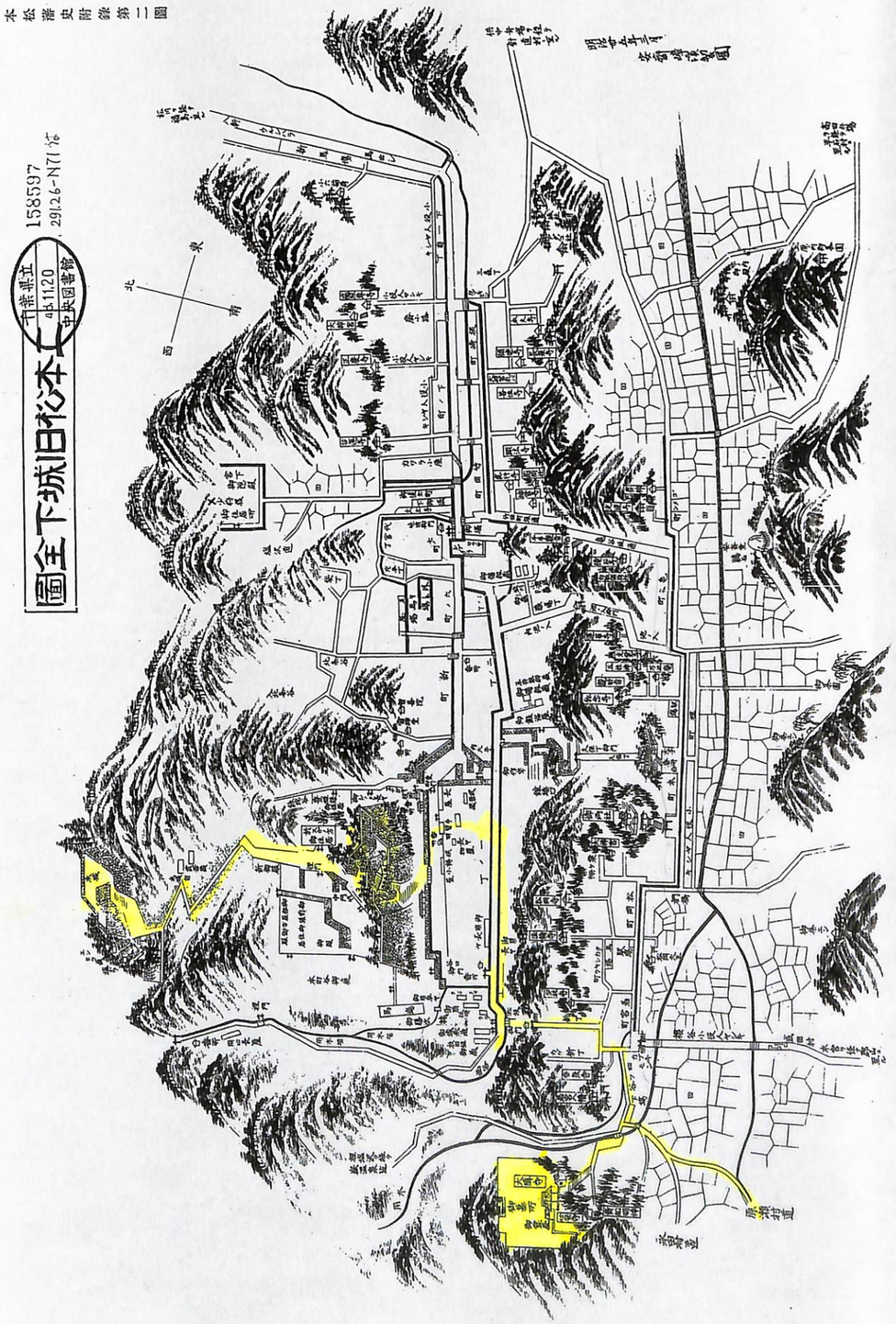
搦手側桜御門周辺の高石垣、水濠も一見の価値。厳しい搦手の守りを窺わせる。



↑三重櫓↓



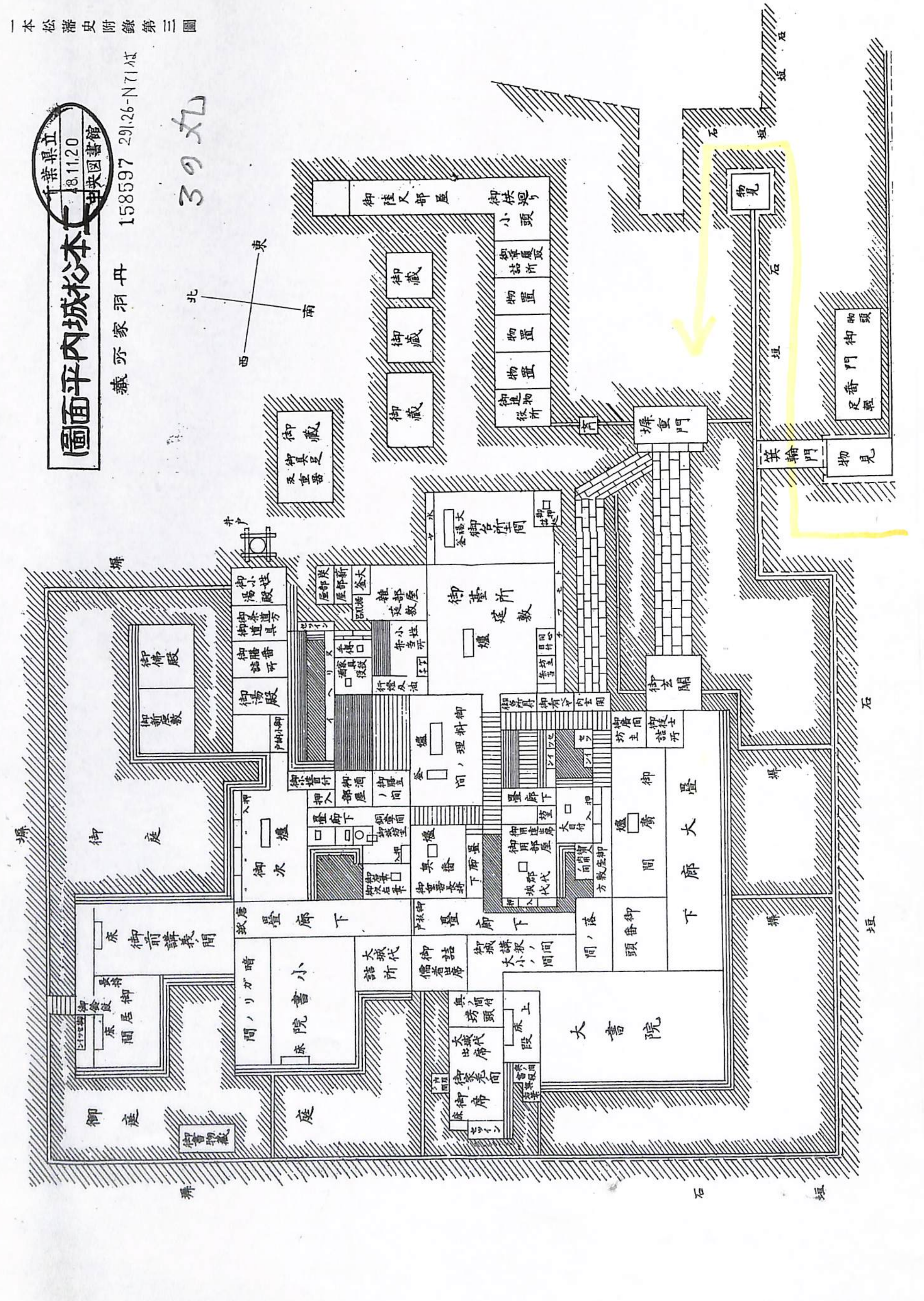
桜門周辺の石垣



11 米松藩史附図第11図

千葉県立
中央図書館
昭11.20
158597
291.2.6-N71

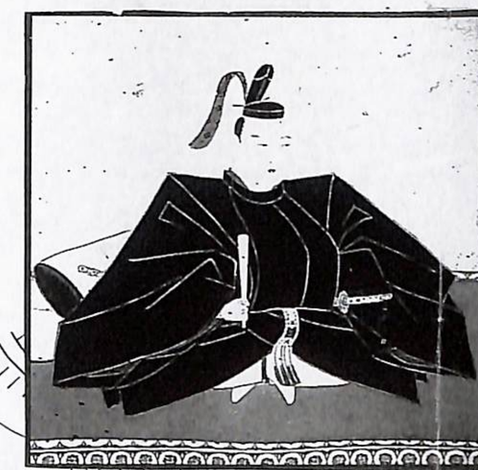
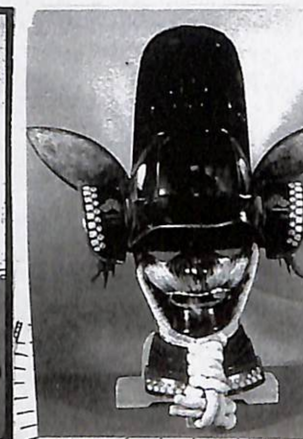
図書館蔵旧松本藩

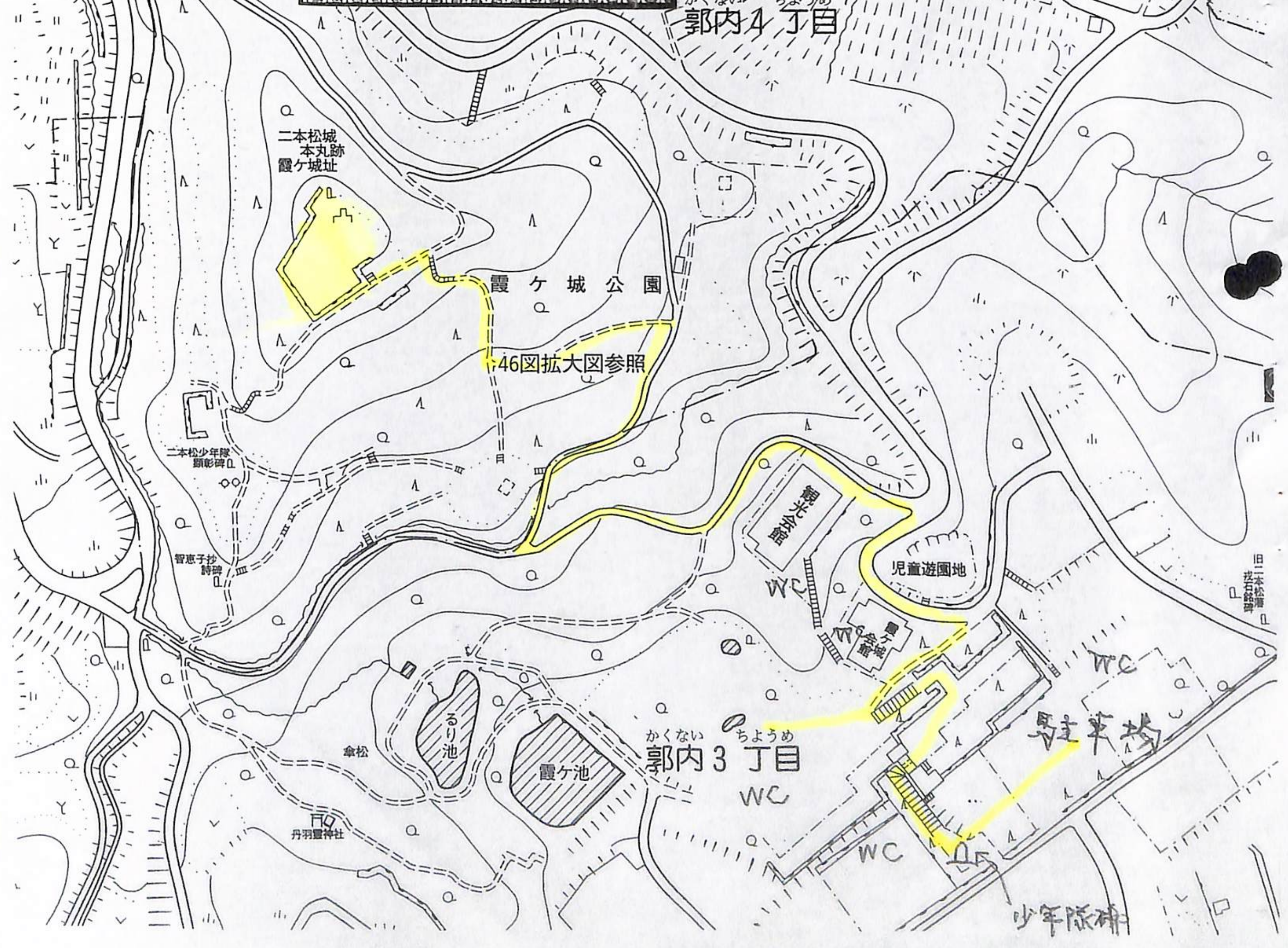


二本松城

石垣は歴史のかたりべ。２度も落城した悲運の名城

二本松も、奥州道と会津地方を抑える南陸奥最大の要衝であった。南北朝時代、足利尊氏から奥州管領に任じられた畠山高国が下り、孫満泰のとき標高３００mの山頂に二本松城を築いた。伊達家が台頭した天正14年、11代義継は伊達輝宗を捕らえたが、輝宗の嫡子政宗は父もろとも義継を射殺し、10か月の城攻めで本丸を焼き払った。天正18年、豊臣秀吉の東北仕置で会津入封した蒲生氏郷の支城と代わり、のち上杉景勝、加藤嘉明、松下重綱と変遷、本丸を拡張して天守閣、東櫓、西櫓を築いた。
寛永20年、白河城から移った10万石の丹羽光重が新規城普請の許可をえて本格的な城郭整備に着手、箕輪門につづく３の丸、２の丸などの近世城郭を構築している。丹羽氏の治世は２28年におよぶ。この間、二本松は城下町として整備され、また奥州街道の宿場町として繁栄した。10代藩主長国は明治維新の戦いで西軍に徹底抗戦、二本松少年隊全滅の悲劇のなか、城内、家中屋敷のすべてを焼失して明治元年７月29日に落城となった。城址は霞ケ城県立自然公園として保存、みごとな石垣に囲まれた箕輪門、本丸石垣などが現存、復元され往時をしのぶことができる。

丹羽光重→   二本松城↓



1） **二本松城下兼宿場町をすすむ**

① 東北自動車道の二本松インターを下りて５分ほどで旧奥州街道の二本松城下に入る。

② 旧奥州街道＝五街道の一つ。二本松の南は白河、宇都宮から日光街道を江戸へ。北は福島、仙台、盛岡をへて青森に通ずる。今も変わらぬ大幹線道路。

③ 二本松＝城下町として発展。町割や道が変わらず、城下町と宿場町の雰囲気を今日に伝えている。駅周辺は旧二本松宿の宿場中心地。街道から大手門につづく久保丁口十字路は東西２本陣、問屋場などで賑わった。江戸後期天明８年、城下町にあたる郊外６町は７23軒、３,118人であった。

④ 郭内＝かつて中上級藩士邸が建ち並んだ武家地。慶応４年の戦いで徹底抗戦の末、すべてを焼きつくした。

2） **戒石銘（国指定史蹟）** 家文

① 江戸中期、丹羽５代藩主高寛（ひろ）が藩制改革と綱紀粛清の指針として建立した。
花崗岩自然石露出面長さ８ｍ、最大幅５ｍ。二本松藩士の士道のよりどころとなった。

② 爾（なんじ）の俸、爾の禄は　　お前がお上からいただく俸禄は
民の膏、民の肪なり　　人民があぶらして働いたたまものである
下民は虐げやすきも　　この気持ちを忘れて弱い人民たちを虐げたりすると
上天は欺きがたし　　きっと天罰がくだるであろう
寛延己（つちのと）巳の年春三月　　寛延２年３月

3） **高石垣（現存修復）と白壁（復元）**

① 石垣は江戸はじめ寛永20年、丹羽光重構築。高さおよそ20m、長さ両翼およそ２00m。
東北の石垣３名城（盛岡、会津若松、白河）の１つ。石材に恵まれた東北地方にも石垣が多い。急勾配、高く美しい完成された石垣の城。

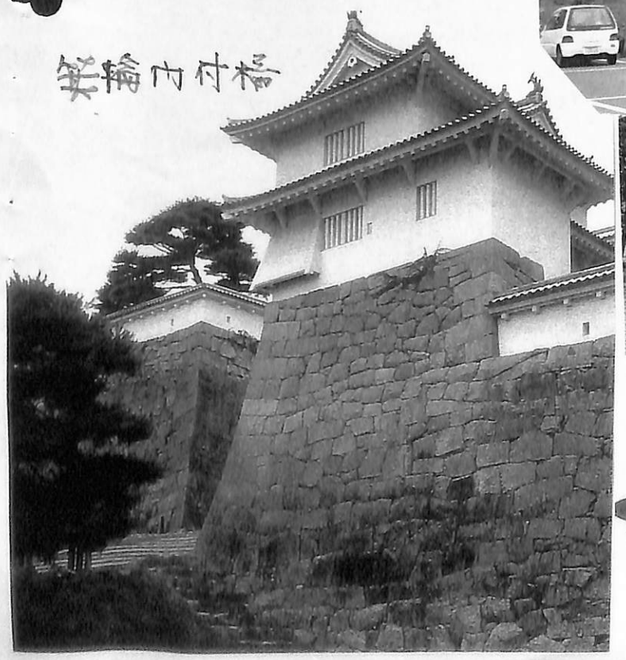
② 石組みはコーナー部算木組＋打込みハギ。濠のない土上の石垣。

③ 白壁は土壁、白漆喰仕上げ、弓、鉄砲狭間、石落とし

④ 手前駐車場は馬場蔵、重臣邸跡。箕輪門付櫓、多聞櫓をのぞむ。

戒石銘

箕輪門付櫓



↑高石垣

←大手口

↓少年隊像

隊長

4） **二本松少年隊の像**

① 明治元年、維新の戦いのとき、奥羽越列藩同盟に属し藩主長国以下主力軍は白河口へ出兵した。ところが７月29日、降服して寝返った三春藩に先導された官軍が二本松城を急襲。このとき城内には家老丹羽一学以下12～17才の志願少年隊らわずか。少年隊に出撃命令がくだる。
隊士22名は大砲を曳いて城の南西７00mの大壇口に向かい、戦端は朝もやをついてはじまる。少年隊は砲弾を撃ち込み弾丸が尽きると、刀を振りかざして敵陣に突入、隊長以下多くが壮烈な最後を遂げた。墓は藩主の菩提寺大隣寺に、鉄砲の訓練をした城内の広場に顕彰碑が立てられている。

② 会津白虎隊以上の悲劇といわれる少年隊だが、案外知られていない。
像は大砲を曳いて大壇口に出陣する少年たちを刻んでいる。

5） **千人溜、上り石段と着到櫓**

① 溜＝兵馬が集結し、控える場所。千人は集まるという広場。

② 着到櫓＝箕輪門付櫓は着到櫓でもある。着到櫓は正面虎口に置かれ、軍勢を確認できる櫓をいう。
馬溜を設け、その前を行進できるようになっている。

6） **箕輪門（復元）**

① 櫓門、付櫓、続多聞櫓、白壁塀がセット。寛永20年建造、慶応４年の戦いで焼失。
門名は櫓門の樫の木を箕輪村山王寺山の神木を切り出したことに由来。

② 櫓門＝２階は武器庫で緊急時の射場、連子窓、狭間。１階は内開き大御門。

③ 付櫓（着到櫓）＝２重櫓。入母屋屋根、本瓦葺き、シャチ付き。２重は飾り破風なし、狭間になる連子窓。初重は連子窓と石落とし、平側裏側入口に入母屋破風。総塗り込み白漆喰仕上げ。普段は武器庫で空間、戦時は着到櫓で、櫓門２階への連絡路でもある。

④ 多聞櫓＝長屋造りの塀。普段は武器庫で空間。緊急時は狭間から弓鉄砲を射掛ける。

⑤ 箕輪門の復元は正確な資料に基づいていないという指摘もある。

7） **３の丸跡、塀重門升形**

① ３の丸塀重門前の広場で大升形。３の丸は塀で区切られ藩主、藩士は塀重門から城内に入り、奥女中は２の丸側の女中門を利用した。

② ３の丸御殿跡＝塀重門を越えると３の丸御殿で藩庁舎跡。役所、会所が置かれた。
玄関式台のある本格的な書院造りであったが、図面、絵図などは現存しない。

箕輪門

二本松城主・城代等の変遷

領主	区別	氏名	支配期間
畠山	城主	満泰（満盛） 持重　政国 村国　家泰 義氏　義国 義継　義綱	嘉吉年間(1441～1443) ～ 天正14年(1586) 7月
伊達政宗	城主	片倉景綱 伊達成実	天正14年(1586) 7月 ～ 天正18年(1590) 8月
	城代	石母田景頼 大條宗綱 柴田宗義	
蒲生氏郷	城代	蒲生郷成 町野繁仍 町野幸和	天正18年(1590) 8月 ～ 慶長３年(1598) 3月
上杉景勝	城代	秋山定綱 下條忠親	慶長３年(1598) 3月～ 慶長６年(1601) 8月
蒲生秀行 蒲生忠郷	城代	梅原弥左衛門 本山安政 本山安行 外池良重 門屋助右衛門 門屋但馬守	慶長６年(1601) 8月 ～ 寛永４年(1627) 1月
〔幕府領〕	在番	酒井右近太夫 太田原晴清	寛永４年(1627) 1月～ 2月
加藤嘉明 加藤明成	城主	松下重綱 松下長綱 加藤明利	寛永４年(1627) 2月 ～ 寛永18年(1641) 3月
	《加藤氏代官支配》		寛永18年3月～寛永20年5月
〔幕府領〕	在番	相馬義胤	寛永20年(1643)5月～8月
丹羽(にわ)	城主	[1]光重　[2]長次 [3]長之　[4]秀延 [5]高寛　[6]高庸 [7]長貴　[8]長祥 [9]長富　[10]長国	寛永20年(1643) 8月 ～ 明治１年(1868)12月

8）　**２の丸跡**

① 藩主と家族が生活する御殿跡。通常、表、中奥と奥に別れ、それぞれ藩主公務の場、生活の場、家族の場とされたが、詳細は不詳。

② 畠山氏時代の館、根古屋跡だが、伊達政宗の猛攻を受けて焼失。丹羽氏時代の御殿は明治維新の戦いで城内の建物すべてを自焼した。

9）　**本丸跡（畠山氏当時の城郭跡）と石垣群（現存、修復、復元）**

① 畠山氏当時の城は２の丸の真上、比高およそ１00mの本丸部分。江戸時代はじめの加藤氏時代に天守閣、東櫓、西櫓の３基を置いたが、寛永以降の丹羽氏時代は詰めの城、石垣だけで建物はなかった。歩いて石垣の宝庫、本丸をめざす。

② 本丸直下大石垣、天守台石垣、西直下二段石垣が現存、発掘調査で本丸西側にも野面積み石垣が発見されたが石材の割れや風化が激しく土中に埋め戻した。

③ 平成７年、５億円をかけて本丸石垣を全面修復、復元工事を実施。各時代にわたる石積み方法はバラエティに富み、「石垣博物館」ともいわれている。

④ 本丸直下大石垣＝もっとも古い石垣のひとつで高さ10mを超す。慶長はじめ蒲生家時代のもので大小の自然石と荒割石を横積みした野面積みになっている。

⑤ 天守台西直下２段石垣＝二本松城最古の現存石垣。搦手斜面に自然石と一部荒割石を積み上げた野面積み、下４m、上3.5mの２段積みで、間に犬走りがある。平成６年、一部露出していた石垣を発掘して全体の姿を公開している。

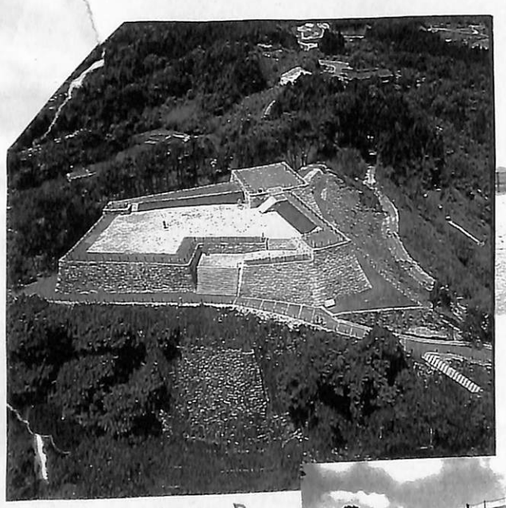
⑥ 天守台保存石垣＝慶長時代の現存石垣を移築。発掘したが風化が激しく将来のこの上に天守閣構築が見込めないとして移築、保存した。野面積みの石組方法がよくわかる。

⑦ 本丸石垣＝すべてが新補石材での復元。天守台は慶長期および江戸後期様式、東櫓台は寛永様式、西櫓台と升形虎口部分は完成された江戸後期形式など時代性が考慮されている。

⑧ 本丸、升形虎口、天守閣跡、東櫓跡、西櫓跡

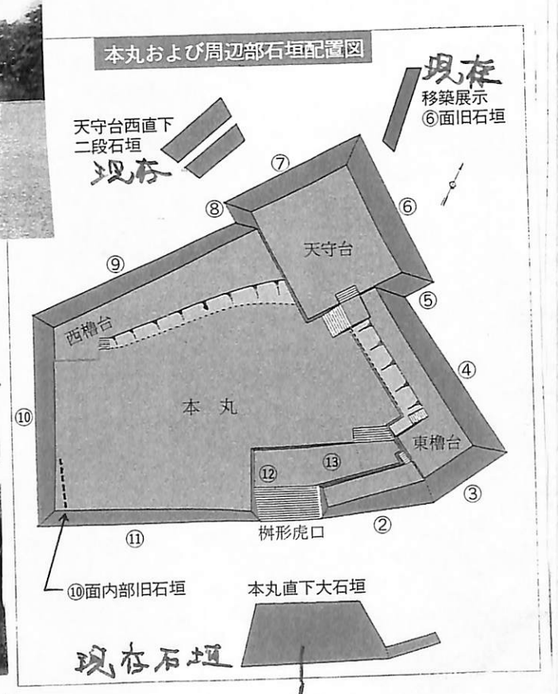
⑨ 本丸からの展望がすばらしい。福島盆地を一望、西に安達太良山、東に阿武隈川が流れる。

以上



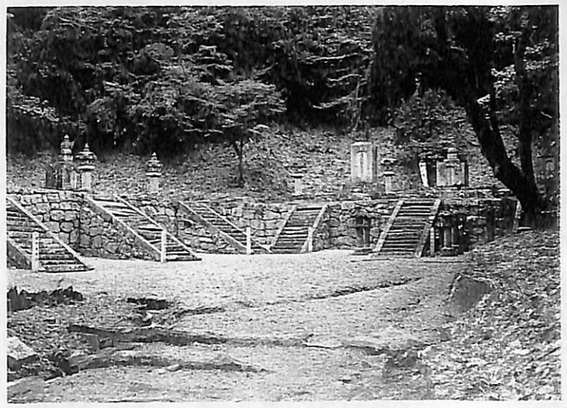
↑本丸全景
東櫓台→

本丸



←本丸からの展望

進行状況で立寄れないことがあります



二本松藩主丹羽家霊廟

二本松藩主丹羽家霊廟
（二本松市大隣寺）

曹洞宗巨邦山大隣寺は丹羽家の菩提寺として丹羽長重が白河円明寺に建立し、寺領二十石を寄進したことにはじまる。その後、丹羽光重が二本松に移封すると大隣寺も二本松に移った。境内には二本松藩祖光重をはじめ歴代藩主の墓がある。

大隣寺　二本松少年隊の墓

大隣寺

市内成田町。二本松駅から15分
N37°35'18"　E140°25'35"

阿武隈川の西岸、背後に山をひかえ、前面には市内を一望できる景勝の地に建つ。丹羽家代々の菩提寺である。

寛永四年（一六二七）、白河城主丹羽長重が藩祖長秀の霊を慰めるため、福井総持寺の融峯を招いて開創し、融峯の師雪山を開山に仰いで寺の基を定めたものである。

三代光重の時、二本松へ移封され、寺もそれに従って移り、寛永二〇年（一六四三）、城の北東にあった松渓山道光寺の跡に再建された。

寛文七年（一六六七）、藩主光重自ら刻んだといわれる釈迦如来像を安置するため、現在のところに堂宇が建てられた。

山門をくぐって左手に、大壇口の戦いで戦死した二本松少年隊の、木村銃太郎隊長ほか一五名の墓がある。ほかに戊辰殉難者群霊塔、本堂裏手に歴代藩主の霊廟がある。

また、この寺には、少年隊士が着用した赤い小さな陣羽織や、当時の大砲、藩主愛用の遺品が数多く収蔵されている。

戊辰戦争の直後は、藩主の謹慎所・藩校などにもあてられていた。

〔宗派〕曹洞宗　〔山号〕巨邦山　〔開山〕雪山

大壇口戦場跡

市内大壇。二本松駅から20分
N37°34'49"　E140°25'35"

二本松少年隊のほとんどが戦死した場所である。

奥羽越列藩同盟の拠点白河城を落とした新政府軍は、三春藩を降して手兵に繰り入れ、慶応四年七月二九日の朝、霞ヶ城に押し寄せてきた。

この時、二本松藩の主力は領外の白河口の守備につき、藩主長国は米沢に逃れていた。城を守るのは、家老丹羽一学と藩主の側近、少年隊や農兵のみであった。

弱冠一二歳の木村銃太郎を隊長に組織された一二～一七歳の少年隊六三名に出陣の命が下り、うち二二名が城の南西にあたる大壇山に向かい、大砲を引いて大壇口を守備した。

戦いは朝もやのなかで始まった。少年たちは砲弾を放ち、矢弾が尽きると刀をかざして敵陣に突入、ほとんどが戦死した。

戦死した少年隊士らは、藩主の菩提所である大隣寺に葬られ、今なお墓前には香華の煙が絶えない。

奥州白河
小峰城
三重櫓

●三重櫓

櫓というのは、矢倉あるいは矢蔵とも書き、武器・食糧の貯蔵と防御とを目的とする建物である。小峰城の三重櫓は、本丸の北東隅に建つ三層三階の櫓で「一国一城令」以後の築城であるため大規模な天守ではなかったものの、その雄姿は奥州関門の名城にふさわしい外観を呈していた。

三重櫓は高さが約十四メートルあり、一、二階には張り出し部分及び石落し、各階に格子窓及び鉄砲狭間を設け、東南北にそれぞれ守りやすい造りとなっている。

屋根は瓦製の鯱（一・二メートル）がのせられた本瓦葺の入母屋形式である。

構造は、三層三階建てで各階二間ずつの低減となっており、安定した形をしている。通し柱の構造が特徴的で、規模の差異はあるものの姫路城天守の通し柱を連想させるものである。また、二階南側の張り出しは会津若松城天守に酷似しているのも特徴である。

当時の建築材は土台には栗材を、通し柱には松材を使用しており、主要材を松材とし他は檜材、桂材等の雑木であったと思われる。

三重櫓建設については、正保元年（一六四四）幕府が白河城主榊原忠次公に命じて作成させた城郭絵図「奥州白河城絵図」（正保城絵図）と、松平定信公が南合義之に命じて写させ文化四年（一八〇七）に完成した「川越候所伝之図」などをもとにしてその復元作業を行った。

●復元にあたって

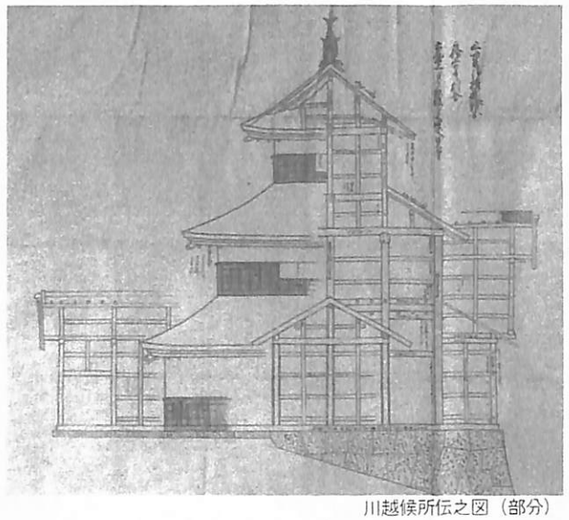
戊辰の役以来、一二〇余年ぶりの三重櫓の復元作業にあたっては、歴史資料の調査・収集をはじめ、正保城絵図、川越候所伝之図、移封転封に伴う城郭絵図、災害時における記録などの文献、古文書類の検討及び考証から始められた。そしてより正確な復元図作成には、三重櫓跡の発掘調査は必須の要件であった。その結果、三重櫓の礎石が完全な形で確認され、「川越候所伝之図」などの図面とほぼ一致することがわかった。

また出土遺物には、築城当時の丹羽家の紋（直違）や阿部家の紋（違鷹羽）入りの瓦などの多量の瓦類や鯱、金属製品（和釘など）、陶磁器、木材、漆喰などがあり、それらを参考にして各所の使用材料を入手、製作可能な範囲で復元されている。

●川越候所伝之図

この絵図は元禄から享保年間の建物の改修絵図であると思われる。

小峰城内の本丸や本丸御殿の縄張り、櫓及び城門などの配置図、建絵図、材料、寸法、屋根勾配などが詳細に描かれている。また正保の城絵図とも非常に一致しており、市の文化財に指定されている貴重な歴史資料の一つである。



川越候所伝之図（部分）

●奥州白河城絵図・正保城絵図

正保城絵図とは、正保元年（一六四四）幕府が諸藩に命じて提出させた城郭とその城下町全体の地図の総称である。

本絵図は城郭内外の距離、石垣の高さ、堀の深さなどのほか、城内の櫓、城門、本丸、二の丸、三の丸などの建築物も詳細に記載されており、築城されて十数年後に城主榊原忠次によって提出された絵図である。

奥州白河城絵図（部分）国立公文書館内閣文庫所蔵「正保城絵図」写

●三重櫓跡より出土した瓦

直違文軒丸瓦

直違丁字唐草文軒平瓦

●三重櫓復元工事のあらまし

1．面積　延べ面積　258.73㎡（78.28坪）
　　1階　170.48㎡（51.58坪）
　　2階　72.64㎡（21.98坪）
　　3階　15.61㎡（4.72坪）
2．構造　杭　…深礎工法6本
　　基礎…鉄筋コンクリート造、スラブの上礎石敷き
　　本体…木造3階建
3．仕様　床　…板張り、一部土間玉石敷きタタキ土
　　内壁…羽目板張り、一部漆喰塗り
　　天井…化粧板張り、根太、梁あらわし
　　外壁…腰、下見板張り古色塗り、漆喰塗り
　　軒裏…漆喰塗り込め、軒先木部古色塗り
　　屋根…本瓦葺

●小峰城

小峰城は南北朝時代、結城親朝が興国元年（一三四〇）小峰ケ岡に城をかまえて小峰城と名づけたのがはじめといわれている。

寛永四年（一六二七）丹羽長重が十万石の城主として棚倉より移封され、幕命により同六年城郭の大改築に着手、四年の歳月を費して同九年に完成。江戸時代における攻防を兼ねた代表的な梯郭式の平山城である。

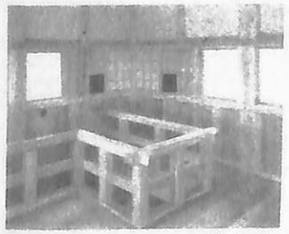
その後、丹羽、榊原、本多、奥平松平、結城松平、久松松平、阿部と七家二十一代の城主の交代があったが、慶応三年（一八六七）最後の阿部氏が棚倉へ移封された後、白河は幕領となって城郭は二本松藩丹羽氏のあずかるところとなり、同四年五月、戊辰の役の攻防で落城した。

丹羽長重画像

●今に残る戊辰の弾痕

戊辰の役当時の激戦地であった松並稲荷山の杉の大木（樹齢約四百年）を復元用材として利用した際、いくつかの鉄砲の鉛玉や弾傷が発見されたがそのまま加工され、現在柱や床板、腰板などにその痕跡を見ることができる。

鉄砲の鉛玉



三階内部

一階内部

戒石銘について

霞ヶ城址は、福島県二本松市（東北本線二本松駅下車、北方約七〇〇㍍、徒歩約一五分）に所在し、江戸時代・寛永二十年（一六四三年）から明治元年（一八六八年）までの二二〇有余年にわたる、二本松藩・丹羽氏一〇万七〇〇石の居城でした。城の東手には藩庁があって、藩士達の通用門がありました。

その藩庁前に露出していた長さ約八・五㍍、最大幅約五㍍の自然石（花崗岩）の大石に刻まれたのが〝戒石銘〟です。

五代藩主（丹羽家七代）丹羽高寛公が、藩儒学者の岩井田昨非の進言により、藩士の戒めとするため、命じて刻ませたもので、寛延二年（一七四九年）三月に完成しました。（この年は、高寛公はすでに致仕（隠居）し、六代藩主高庸公（高寛公の長男）の治世でした。）銘は、露出面の縦一・〇三㍍、横一・八二㍍の間に、四句一六字を刻みこんだもので、その書体は非常に典雅さが感じられます。

	（読みかた）	（意味）
爾俸爾禄	爾の俸 爾の禄は	お前がお上から戴く俸禄（給料）は、
民膏民脂	民の膏 民の脂なり	人民の汗と脂の結晶である。
下民易虐	下民は虐げ易きも	下々の人民は虐げ易いけれども、
上天難欺	上天は欺き難し	神をあざむくことはできない。

寛延己巳之年春三月　　寛延己巳之年春三月

つまり、「お前(武士)の俸給は、人民があぶらして働いたたまものより得ているのである。お前は人民に感謝し、いたわらねばならない。この気持を忘れて弱い人民達を虐げたりすると、きっと天罰があろうぞ。」、と解釈されています。

この戒石銘が、二本松藩士の士風を奮い起こしたことは言うまでもありません。明治戊辰の戦役において、藩の子弟が二本松少年隊として西軍に対して奮戦力闘し士道に殉じ、また重臣の多くが城を枕に自刃して武士の亀鑑（模範）を示したこともまた、この戒石銘の余香であったと思われます。

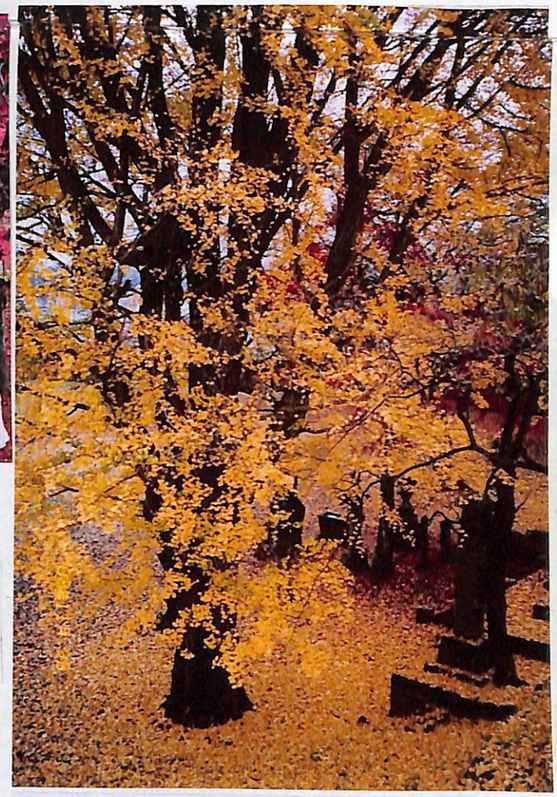
昭和十年（一九三五年）十二月二十四日、教育資料として、また行政の規範として価値の高いものであるため、国史跡「旧二本松藩戒石銘碑」として指定されました。

二本松観光協会
福島県二本松市金色４０３番地の１
ＴＥＬ　０２４３（２３）１１１１

©１９９６ NIHONMATSU

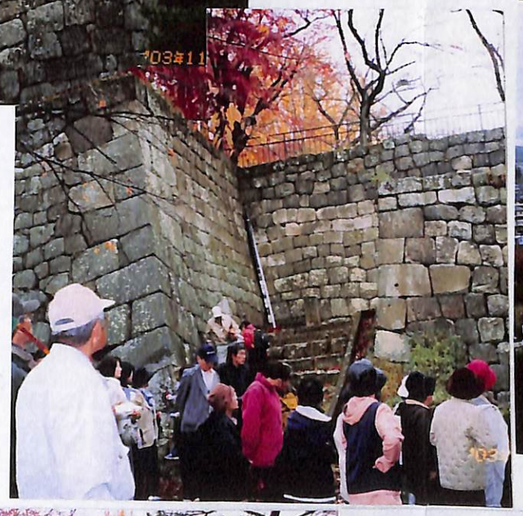
← 小峰城正面　内堀 ↑

紅葉 ↑ →



ALBUM－1
白河小峰城

↑ 高石垣 矢狭間
← 本丸天守閣
← 竹飯跡
清水門 ↓



本丸からばら園越しに白河市街

内堀 ↓

● 城と史跡を歩く会第２７回
白河小峰城と二本松城を歩くバスツアー
ＡＬＢＵＭ　平成１５年１１月９日

主要見学コース
白河小峰城、二本松城、大輪寺
参加者　４９名（満席＝あいうえお順）
熱田百代、池田美志子、市原享子、板垣てる、板倉満、稲葉ミツ子、猪野春枝、今井勝昭、卯月冨子、大岩勝男、小北絢士、荻田恵子、小倉すみ、加藤幸子、金子昭夫、神林敏夫、神林良雄、小出敏子、小山章一、斉藤定子、斉藤　実、笹島　稔、渋木奎吾、渋木恵美子、白土貞子、鈴木クニ子、鈴木淳子、高城正雄、高城富子、竹内　克、竹上　茂、田中勝子、千葉範子、藤沢真知子、皆川　清、山城美智、山田恵美、吉池一彦、吉水正子、柳沼房子、若菜幾世、渡辺清枝。山岸弘明、高澤恒子、鷲津寛子、小出惣治、高澤　毅

お知らせ
①次回予告＝第２８回「鎌倉、紅葉の朝比奈切通しと釈迦堂口を歩く」１２月６日（予備日７日）
予告編参照。欠席者は世話人に必ず連絡ください。
②「平成１６年前半のスケジュール」は鎌倉で配付します。
城と史跡を歩く会＝４２－２２３７山岸弘明

← 三の丸

竹の丸　Photo 皆川 肇、高澤恒子

紅葉まっさかり

本丸

二本松少年隊の像 ↑↗

本丸へ

本丸からの展望

ALBUM－2

二本松城

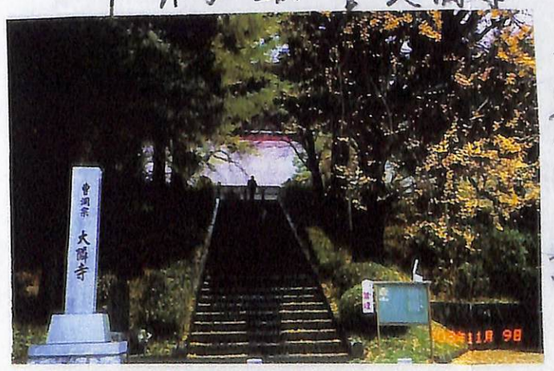
みのわ門

← みのわ門前

↓ 荷方埋

↑ 井戸跡 ↙ 大鳴寺

二本松菊まつり



→ 少年隊の墓